小野 あずさ

日本の巨匠 - 蜷川氏の公演を通して

蜷川氏が他界されてから、早くも一年半が経ちました。一周忌追悼公演として今年の秋に、蜷川氏が1987年以来、何度も演出を手掛けられた作品『NINAGAWAマクベス』が、イギリスのロンドンとプリマスの劇場で上演されました。

今まで私が照明通訳として関わらせていただいた、蜷川氏のロンドン公演は、2007年の『コリオレイナス』、2009年の『NINAGAWA十二夜』、2010年の『ムサシ』、2012年の『シンベリン』、2015年の『海辺のカフカ』と『ハムレット』と、今回の『NINAGAWAマクベス』です。これらのほとんどの作品が、ロンドンのバービカン劇場で行われました。

日本演劇界の大御所である方々のお仕事ぶりを、中から外まで間近で見られる機会は、普通ではなかなかありません。通訳をしていると、仕事のプロセスが細かく見えてきますし、日本照明の巨匠たちのデザインを、シュートから仕上げまで、しっかり見ることができる、なんとも恵まれた機会です。このような貴重な機会をいただき、蜷川氏とバービカン劇場に感謝の気持ちで一杯です。

関わらせていただいた、過去6回の公演で、照明の巨匠、原田保氏、勝柴次郎氏、服部基氏、そして彼らのチームとお会いできたことは、とても刺激的で、光栄でした。それぞれの個性とこだわり、演出のどこに焦点を当てるかの違いが見れて、とても勉強になりました。特に原田氏の「演出上でメタファーがあるものは、どんなに小さいものでも湧き立たせるために照明を当てる」というお言葉は、彼の繊細な照明にそのまま現れていました。技術的な知識はもちろん必要ですが、照明家にとって何よりも大事なことと感じたのは、台本と稽古を通して、物語のどこに重点を置くか、演出上の何にフォーカスさせるか、自らはっきり見出していく理解力と想像力が必要とされるお仕事だと強く感じました。蜷川氏が要求することに対して、ただ技術的、実用的に反応するのではなく、心で受け止め、それを自分の世界観と照らし合わせて消化し、気持ち（明かり）で応えていらっしゃるところが、とても印象的でした。勝柴氏の『ムサシ』の照明では、武蔵と小次郎の最後の決闘で、舞台奥に浮かび上がる太陽が、燃え上がるように微かに揺れているように見えました。熱気がこちらにも伝わってくるようでした。服部氏の『ハムレット』の照明では、真っ赤なバックライトが一方向から、一直線にハムレットの背中を引き裂くような、強烈な明かりが印象的で、感情に訴えかけてくるものがありました。服部氏は、どうしてこのキューはこうでなきゃならないのかと、台本をチーフに見せながら、丁寧に説明していらっしゃるところを目にして感じました。「ああ、愛ですね。こうやって吉井氏、沢田氏の時代から、次の時代へと照明が受け継がれてきたのか」と感心して聞いていたのを覚えています。

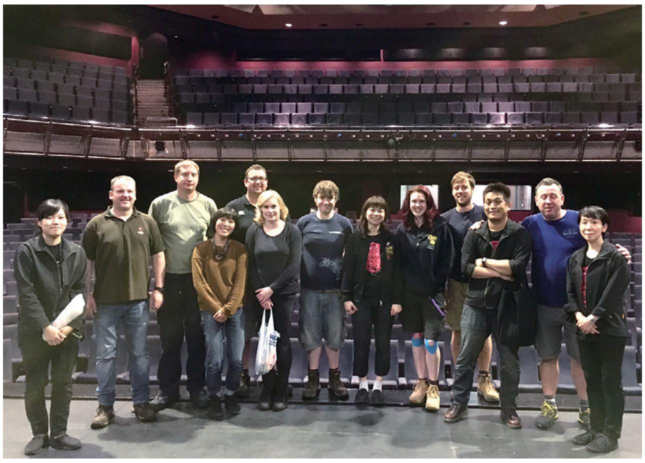
『NINAGAWAマクベス』公演の照明デザイン（オリジナルは30年前に完成済）を手掛けられた吉井澄雄氏は、今回イギリスにはおいでになられませんでしたが、吉井氏の言葉を失うほどの美しい照明は、アソシエイト照明デザイナーで、ASG社員の鈴木尚美氏とそのチームによって、忠実に再現されていました。ムービングが数台増やされたものの、吉井氏の30年前のデザインが蘇るのを見れて、本当に感激しました！何十年経っても色褪せない、美しい絵画を見ているかのようでした。

そのような巨匠の下で働いていらっしゃる、日本人照明チームも、各自、物語への思いや考えをもちながら、自分の仕事へ黙々と専念している姿は、見ていてとても清々しかったです。特に日本はイギリスのように、舞台監督がすべての照明キューを出すことがないので、一人ひとり台本が頭に入っている様子。自分のきっかけは自分の意思で押すという、一つひとつのキューが、重みのある「GO / 実行」だとすごく感じました。気持ちを込めて仕事をするということは、こういうことなのかと。

そのような積み重ねと、そこで養われた作品に対する感受性が、デザイナーになったときに生かされ、鋭い目をもって明かり作りに取り組めるようになるのでしょうか。今、偉大な巨匠につかれている、アソシエイト照明デザイナーの方々が、今後どのような素晴らしいデザインを世に送り出していくのか、期待が高まります。日本に帰った際は、もっと舞台に足を運びたいと思います。

長々となってしまいましたが、今年もお付き合いいただき、どうもありがとうございました。年末にむけて、益々お忙しくなることと思いますが、皆様お体に気をつけて、良いお年をお迎え下さい。

『NINAGAWAマクベス』プリマス公演



シアターロイヤルプリマス劇場のクルーとASGの皆さん